

## 《真珠の耳飾りの少女》世界初演

2020年に上演される予定だったシユテファン・ヴィルト《真珠の耳飾りの少女》が、4月3日チューリヒ歌劇場でようやく目の目を見た。トレイシー・シユヴァリエの同名ベストセラー小説を元に、1975年生まれのヴィルトが初めて手がけたオペラは、この小説がスカレット・ヨハンソン主演で2003年に映画化されていることもあり、10歳代の聴衆にまで興味を持たれていた。映画の効果音や感情が高まったときに流れる音楽がオペラでは一貫して流れているため、必要に応じて強調するだけで、自然に感嘆や緊張感を描写したり、ハラハラする気持ちをおおったりでき、このような小説を視覚化するには最適な芸術の形態だと思わせられた。

現代曲に定評のあるペーター・ルンデルの指揮は安定感があり、絵画的に視覚に訴える演出家のテッド・ハフマンは影絵まで効果的に使って、この有名すぎる名画の記憶を逆なでしない舞台を上手に創り上げた。画家フェルメール役のトーマス・ハンブソンはさすがの存在感で、主演のローレン・スナッフアーを音楽的にも、演劇的にも上手くサポートしていた。そのスナッフアーは安定した歌唱力と、ヨハンソンが映画で演じた同役の記憶を裏切らないオーラで、適役だった。子供3人の声を歌い分ける難役のリザ・タタン、妻カタリーナ役のローラ・アイキンらの実力も支えとなり、完成度の高い仕上がりになっていた。

## コンダクターズ・アカデミー

バーヴォ・ヤルヴィがトーンハレ管弦楽団の首席指揮者兼音楽監督に就任して初めてのコンダクターズ・アカデミーはロックダウンで流れ、去年は無観客で実行され、ストリーミングで公開された。これがすばらしい効果を生み、ふつうでは見られない微妙な手の動きや表情が読み取れて、楽団員として共演しているような臨場感が楽しめた。そんな長所を生かして、今年4月7〜9日にハイブリッドで開講した。

271人の応募者から選ばれた6人は以下の通りだ。スイス人のアンソニー・フルニエはジストニアを思い、ヴァイオリニストのキャリアを断念して指揮に転向した。

ラトヴィア人のアイヴィス・グレタスはバルス音楽祭でヤルヴィのマスタークラスを2度受講している。ポーランド人のゾフィア・キニョルスカはピアノを学んだあと、アシスタント指揮者として活動している。オルガニスト、ピアノでもあるロシア人のリウウオフ・ノソヴァはチューリヒ芸術大学はじめ各国で学び、現在はドイツの奨学生だ。韓国人のイェリ・パークは祖国で作曲と指揮を学んだあと、ウィーンへ留学。フィンランド人のヤンネ・ヴァルキアオキは有名なアコーディオン奏者でも。

ヤルヴィのアドヴァイスは楽団員も学ばせるほどの確で、聴衆も共に学ぶことができた。呼吸の大切さ、拍を振るのではなくフレージングを振るこ

と、ボディ・ランゲージのボキヤブラリーを増やすこと、なるべく小ぶりに指揮すること、そのときどきいちばん大切なパートとコンタクトを取ることで、振り下ろす前の「間」、集中力やドラマの構築などを2日間にわたり指導した。

9日の終了コンサートではウェーバー《魔弾の射手》序曲をヴァルキアオキが、第2コンサートマスターのピーター・マクグワイアーをソリストに立てたペーターヴェン「ロマンズ2番」をパークが振り、ソロ・チェリスタに昇格したてのパウル・ハンドシユケが弾くフォーレ《エレジー》

はキニョルスカが指揮した。ドヴォルジャーク「交響曲第6番」はノソヴァ、グレタス、キニョルスカ、フルニエの順に各楽章を別々の受講者が振り、最後はヨゼフ・シユトラウス《天体の音楽》でグレタスが再登場した。結果、グレタスが優勝して今年バルス音楽祭への切符を手にし、聴衆賞はキニョルスカに与えられた。

## ルツェルン音楽祭「メンデルスゾーン・フェスティバル」

4月8〜10日にはルツェルン音楽祭がメンデルスゾーンと3人の作曲家をテーマにした。第1日「ワーグナー」では、いつになくニヤニヤとうれしそうに登場したリツカルド・シャイヤーが、ルツェルン祝祭管弦楽団を名演へ導いた。ワーグナー「パルジファル」前奏曲が薄いヴェールに覆われているような音で始まり、完全な静寂に支配された。そのヴェールが消えると、すごいテンションで一音一音を愛でながら、壮大な音楽を創り上げた。木管楽器は凝びもあつたが、金管楽器はすばらしかった。メンデルスゾーン「交響曲第5番《宗教改革》」、休憩後の同「交響曲第3番《スコットランド》」は複合的な構築感が深い解釈を与えていた。ワーグナー「ローエングリン」前奏曲では、イタリア人らしいドラマ性を聴かせた。

2日目の「シューマン」はウクライナのためのチャリティー・コンサートとなり、アンネツファイ・ムター(VI)やキアン・ソルターニ(VC)、ユリアンナ・アヴェデーエワ(D)らが室内楽を奏で、シルヴェストロフやシヨスタコーヴィチで反戦を訴えた。3日目は再び祝祭管弦楽団が「ペルリオーズ」を披露し、のべ4千人を楽ませた。



10歳代の聴衆にも興味を持たれた、チューリヒ歌劇場の《真珠の耳飾りの少女》から  
©Toni Suter